

インフィニットストラトス 侍ティーチャー

とあるガンマーの武士仮面

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は突如変わった

篠ノ之 束によって開発された女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」（アイエス）の出現後、男女の社会的な立場が完全に一変、女尊男卑が当たり前になってしまった時代

世界は180度変わり、男性よりも女性の地位が上になり、あらゆること全てが女性の優位になるようになってしまった

そして男性は理不尽な立場に陥っていた

だがその世界でそんな風潮に負けることなく抗った男がいた

その男、侍の心を持ち！職業は教師！

どうもグラハムです。

色々勉強してまた小説を投稿しようかと思いましたが執筆させていただけました。

ここ最近インフィニットストラトスのssを読んでいて書きたくて書きたくてウズウズしていました笑

まだまだ未熟者なので温かい応援よろしくお願いします。

タイトル（仮）

目次

侍のモーニングルーティーン	1
侍、IS学園へ	4

侍のモーニングルーティーン

ジリリリリン ジリリリリン く

カチ ピツ

「ふああ、あーねみいー」

そう言っつて男は頭をボリボリとかきながら目を覚ました。

そう彼がこのSSの主人公(笑)なのである。

「つておい！何が(笑)だよ！作者！もう少しましな言葉つていうもんがあるだろよ！」

えっ？なんだつて？まあそんなことはさておき「無視かよ！」それよりもやることあるんじゃない？。昨日何も準備してないんだし？

「あつーやべー！やるの忘れてた！」

今何時だ？えつと6時半か…なんとかなるかな？」

ったく、今日から異動だつていうのになにもやってなかったのか…
せめて荷物ぐらいいは準備してるかと思っただけど…

「すいません許してください何でもしますから！」

ん？ 今何でもするつて言っただよね？

「えっ…それは…」

つてこんなところで淫夢トークしている場合じゃねえ！

とつとと準備！準備！」

そうだよ(便乗)

バタバタと準備する主人公であった

さてと私も読者の皆様に説明しよう

と言いながらどこからか出したであろう謎の分厚い本を取り出した

この本によるとこのSSの主人公…おつとこの主人公の名前はその後教えるようにしましょう

なんで今言わないのかつて？まあ色々ありまして(言えないまだ決めてないなんて言えない)

さて話を戻してこの主人公の職業は教師であり、今年度の人事異動により田舎の学校からIS学園に行くことになった

彼はISを操縦することも出来ない、ましてやISに触れても反応すらないのだ

ではなぜ彼がIS学園に異動となったかというところ

世界で初めてISを動かした男性…

織斑一夏

彼はそれによりIS学園に通うことになったが、だがIS学園ではほぼ女性しかおらず、男性の教員もわずか数名のみ

日本政府はそれはさすがにかわいそうだろうということで日本各地から教員を異動させることにした

主人公はその異動者に選ばれたのであった

だが日本政府はただの教員を異動させただけではない

その教員はただものではない…

おっと少し読みすぎてしまったようだ、ここから先は時がくれば話そうか

そうこうしている内に主人公が準備できたようだ

気づけばもう10分経っていたようだ

えっ？話の内容にしては時間が経つのは速すぎでは？だと……

「世の中気にしちゃあいけねえこともあるさ（江戸っ子）」

世の中気にしてはいけないこともあるさ…

「つたく、まあいいや。」

それより準備終わったから向かうか…

IS学園へ…」

先程の10分で全て準備した、彼はクリーニング出したばかりのスーツを着て、いっちょまえにカッコよくジャケットを羽織り、我が家を出る。

「元栓よし！コンセントよし！電気よし！

っし、行きますか」

これまた真新しい革靴を履き、そそくさと家を出る

「鍵よしー！」

鍵を閉め、振り向いたときに愛車の鍵を開ける
んーなんとクールだ

「お褒め頂いてどうも」

いや誉めた訳ではないよ

「違うんかい、こんなところで漫才している場合じゃねえ」

と言いながら車に乗り、エンジンをかけた

ブウウウウン！

「よし出発進行！」

今回はここまで「えっ！もう終わり！せめて学校着くまでやっても
…」いやあ作者眠いらしいんさ

「寝たいだけか！」

まあそれは嘘なんだけど次のネタ仕込むからここまでと

「なんだそういうことか、じゃあ次はIS学園に着いてからというこ
とね」

続く

ねえママあそこで独り言言っているよ

めっ！見ちゃいけません！

(心が痛い…)

侍、IS学園へ

どこかにある…

世界を変えたとある天才（天災）のいるラボ…

「ふんふんふん

なくんか面白いことないかなあ〜

ん？（。ε。；）ムムツ！へえ〜、

〇〇ちゃんがIS学園にねえ〜

ピコーン！なんか面白いこと思い付いた！

この天才！束さんが今から面白くしてあげるよ！

〇〇ちゃん楽しみにしててねえ〜」

どこか裏がありそうな笑い声が…

1人しかいないラボに響いた…

場所は変わりここはIS学園

ISが開発された為、世界各国が総出で日本に建てられた、IS操縦者を育成する学園である。

IS操縦者は女性とされているため、生徒は女子で占められ、無論教師もほとんど女性で占められている。

男性教師もいるがこの風潮でごくわずかしかない。

そんな学園に1人の教師が来たのであった！

「ねえねえ、その可愛い子。この後お茶しない？」

…失礼、違う人物が映り込んでしまったようだ。

気を取り直してもう一度。

「ねえねえ、その可愛いお姉さん、この後お暇？」

オイイイイ！テメエなにナンパしてんだああああ！

「えっ？いやあそこに可愛い、綺麗な人がいたんで…」

いやいたんでじゃなくて！あんた！これから仕事だろう

がああああ！

しかもここ学校おおお！あんたなに検問の人誘ってるの！その

人も仕事あるし！今現在進行形で工作中だからああああ！

「うーん、今日のお仕事、お昼までだから、お茶というよりランチにしない？」

「いやあんたも！のるなよ！」

「つうかこいつお昼どころか夜まで仕事だから！」

「なんならディナーにしようか、夜景の綺麗な良い店知ってるからそこにしようか」

「いやそういくのかよ！」

「つたくしかたねえ！職員室行くか！」

「お姉さんまた後でねえくバーイ！」

「どこかのピンクの服を着た芸人が言ってそうなセリフを言いながら、職員室へ向かうのであった。」

10分後

「あれ？職員室どこ？」

「迷ったのであった」

「おいおいやべえって、検問のお姉さんに聞いたけど、ナンパに夢中で忘れちゃったし！」

「どうしよう、さつきから誰も通らないし…」

「はあ初っぱなから大失敗か…」

「ナンパに夢中で忘れてたのか…」

「ん？誰か来たぞ？」

「そこの君？いったいどうした？」

「いえ、人生という道に迷いました…」

「そうか、その角を右に曲がって、左に曲がってさらに右に曲がったところが出口だ、このまま人生相談所に行くといい」

「いや！人生も若干迷ってますけど！本当は道に迷ったんです！」

「やっぱそうか、そんなようだとは思ったけど…」

「だが貴様何者だ？まさか部外者ですとは言わないだろうな…！」ギ
リッ

「ヒッ！コワイ！」

「いえいえ、本日からこの I S 学園にて教鞭を取ることになりました、
沖田 忠勝

と申します」

「なんだ同僚だったとは、それは失敬

私は貴殿と同じく、この学校で教鞭を取っている、織斑千冬だ

幸いまだ時間には余裕がある、職員室へ案内しよう」

(……あれがかの有名なブリュンヒルデか……見た目もおっかなそうだな……まだ会ったばかりだから何もわからないけど悪い人……ではなさそうだな……)

(急遽、日本政府から男性教師を派遣すると言っていたが……なかなか面白いやつではないか……まだ何もわかったことではないが……これから見極めさせてもらうか……)

双方ともに考えていることは案外同じだったようだ。

ピンポンパンポーン

「織斑先生、沖田先生、至急学園長室までお越してください」

ピンポンパンポーン

「どうやら目的地が変わったな、まあ職員室の隣だ、通る道は変わらない」

「そうなんですか、では急いで向かいますか」

—————

場所は変わってここは理事長室。

高校や大学と同じように職員室の隣にある。

そしてここにいるのは……

「織斑先生、沖田先生急にお呼びたてして申し訳ない。

まだ入学式やらの準備でお忙しいところでしょう」

そうこの学園のトップであり、ボスの轡木 十蔵である！

「いえ理事長、もうほぼ済んでいましたし、あとは本番を迎えるだけです」

「そうですか、いや今年も沢山の生徒が入学して嬉しいことです

ささ、立ち話もなんですし、どうぞお座りください」

どうやらそこそこ重要な話なんだろう二人とも「失礼します」と言

いながら座る。

事務の者からお茶をだされた、飲んでみると少しお高い感じがした。

「今回お呼びした件なのですが、沖田先生は急遽異動となりましたので担当が決まっておりますのでその件についてのお話になるのですが…」

私の一存で先程決めたことなのですが…

織斑先生の担当クラスに補佐ということに決定しましたので、それをお願いしようかと…」

「了解しました、いえ最初はフリーかと思っていたのですが…」

よもや織斑先生のクラスでやらせていただけただけは…

とても光栄です」

「沖田先生も口がお上手で…」

理事長了解しました」

「では沖田先生何かわからないことがありましたら、この織斑先生とそれから副担任の山田先生に聞いてください」

さてお話は以上になるのですが、

沖田先生は担当教科は社会科だとか…

聞いたところによると以前の学校でも好評でなんとも日本どこから世界各国でも有名だとか…

期待しております」

「沖田先生、社会科担当ですか…」

いや私はIS以外の事はほとんど無知なものですので…」

「理事長も織斑先生もそんなに囃し立てないでください…」

私はしがない教師の端くれですよ…

たまたま教えてた大勢の生徒が名門大学に合格しただけですよ…

それに海外での講演がたまたま好評だっただけであつて…

そんな誉められたものではございませんよ…」

「いやいや沖田先生、お上手なこと…」

さて世間話もこの辺にしておいて、そろそろ会場に移動しますか」
「では沖田先生、会場へも私が案内します、そのあと校内の案内等やら

せていただきます」

「織斑先生、なにもかもありがとうございます」

「では理事長失礼します」

2人が出て少し経ち、理事長は窓から空を見上げる

「沖田忠勝先生…頼みますよ…」

「今年は波乱万丈になりそうですから…」

その目が見ているのは空ではなく…

違うものを見ているようだった…

—————

入学式もどの学校でもあるように進んでいき…

「今年度、着任された先生の説明とご挨拶です」

…

「続きまして沖田忠勝先生です」

「初めまして沖田忠勝です」

担当教科は社会科、主に1年生を担当します。ISの知識は皆無ですが、私の持っている知識をフル活用して皆さんに教えていきたいと思っております

皆さん、よろしく願います」

「続きまして…」

順調にいき終わった。

—————

「授業は明日からか…」

今日はもう終わりで、残業もないし、校内の案内もしてもらったから帰るかな」

「沖田先生、明日からよろしく願います。

「そうそう沖田先生こちらが山田先生です」

「初めまして山田真耶です。沖田先生と同じく1年1組の副担任を勤めています、よろしく願いますね。」

「おっとこれは沖田のドストライクゾーンだ！」

「そして作者のドストライクゾーンでもある！」

「初めまして沖田忠勝です、美しい山田先生と一緒に学校に赴任でき

るとは…

もしよろしければこの後ディナーでも…」

「えっ？そんな美しいだなんて…」

しかもディナーだなんて、そんなそんな…」

早速ナンパだよ！

しかも山田先生も嬉しそうにくねくねしてるし…

「あー、沖田先生？女性を口説くのは構いませんが…

せめて学校内では自粛してもらえたらと…

あと山田先生もそこまでにしてももらえたらと…」ゴゴゴ…

なんか謎のオーラを感じる！

なんだ！なんかヤバイ！

「すみません、ちよつとしたご挨拶のつもりだったんですけど…（ヤ

ベエ！めちやくちや怖えー）」

「すみませんちよつと興奮しちゃって…

私ったら…」

（山田先生満更でもなさそうだったな）

「あはは、今日は自分この辺で上がらせてもらいますね

あと家で教材の準備もありますし、ではお先失礼します」

沖田が職員室を去り、千冬は…

「あの先生も色々と難ありそうだな…（私も人のこと言えないが）

しかしなんで今になって異動？なにか裏がありそうだな…

山田先生はなにか思う点ありますか？」

「私は特に思い付かないのですが…

日本政府からなにかしらの指示があるのかと…」

「政府からの指示か…

だとするとなんだ？データでも手に入れるのか？果たしていった

い…」

「そんなに考えてもわかることではありませんし、今は様子見で良い

かと思えますよ…

なにかあったら我々が全力で止めるまでですし…」

「…まあそうだな、深く考えたところでわかる訳ではなからう

さて我々もやることやって帰るとするか…」

――――
帰り道沖田は考えていた

（あれが織斑一夏の姉でありブリュンヒルデと呼ばれている織斑千冬か
…

今後どう動くか慎重に考えないとな…

あと山田真耶…彼女も織斑千冬と一緒に行動しているし、それにな
かなか頭がキレるな…

だが1番難解なのは…理事長…轡木十蔵…だな…なかなか掴めな
い相手と見た、俺のことをどこまで把握しているのか…

まあいい俺は使命果たすのみ…

明日だな…彼とお目にかかるのは…

織斑一夏

楽しみにしておこうか…)

果たして彼の使命とはいったい何か…

それは…

おっと読みすぎましたね、時が来たらわかるでしょう…

続く！

「あつ！ヤベエ忘れてた！」

ん？何か忘れたようだ。

だがカバンとかは持ってきている…

まさか…

「織斑先生と山田先生の連絡先貰うの忘れてた！」

やはりそんなことだった

「俺にとってはそんなことではない！

かなり重要なことだ！」

…もう放っておこう…